新学部長に聞く

矢野文学部長

室井経済学部長

2学部長は再任

室井　義雄　経済学部長
矢野　建一　文学部長

任期満了に伴う経済学部長、経営学部長、文学部長の改選が、各学部教授会で行われた。

室井義雄経済学部長と矢野建一文学部長が再任され、経営学部長には、瓶子長幸教授が新たに選任された。

任期はいずれも本年9月1日から2年間。

学部ビジョン　理論と実践の融合を推進

ビジネス現場で活躍する「中核人材」を育成

瓶子（へいし）　長幸（ながゆき）　経営学部長

ビジネスの現場で活躍する中核人材を育成するため、07年度から新カリキュラムを導入した経営学部。「経営入門」「会計入門」「マーケティング入門」「情報処理入門」といった必修科目で基礎を学び、テーマ講座では、10の領域から興味のある2つのテーマを選ぶ。多彩な演習科目と少人数、双方向の授業で学生のヤル気を引き出す。新経営学部長に就任の決意を伺った。

☆　☆　☆　☆

新カリの完成年度まであと2年半。学部ビジョン「理論と実践の融合」を推進し、指示されるのではなく、自分で課題を見つけ、自分の力で解決できる学生を生み出し、「経営学部で学んでよかった」という満足感をもった学生を送り出したいと考えています。1年次の入門ゼミナールでは、各自が興味をもつ社会的問題を調べて発表しますが、「調べる」「書く」「発表する」「相手に理解してもらう」という学びの基本が得られます。今年の発表は力作ぞろいでした。どう伸びていってくれるか楽しみです。

奨学生の面接を担当したときに、公認会計士を目指している、資格を取得したいといった目標を掲げている多くの学生に出会いました。高校時代にすでに資格を取得している人や資格取得を目指している人に、積極的にわが学部に入学してもらい、よい影響を学部内に広げていってほしいと期待して、09年度入試から公募制推薦入試制度を導入します。

学部の4年次に在籍しながら大学院修士課程で10単位まで取得することができる「特修コース」が今年度から始まりました。計5年間で修士の学位をとることができます。基本を学部で学び、大学院で掘り下げた学びをすることが可能となります。

新カリに安住することなく「スクラップアンドビルド」を繰り返しながら、社会が必要とする学問を取り入れていかなければなりません。会計、マーケティング、情報など幅広い系列を持つのが、わが学部の特徴です。

実務に精通した教員スタッフを拡充し、社会の変化にすみやかに対応できる教育活動を展開していきます。

◇　◇　◇　◇

散歩をしながら町の移り変わりや季節の変化を楽しみ、なじみの喫茶店での一杯のコーヒーがオンとオフの切り替えをしてくれるという。

一橋大学大学院商学研究科修士課程修了。同博士後期課程単位取得満期退学。1980年本学専任助手、81年講師、83年助教授、89年教授。専門分野は会計学。福島県出身。58歳。

活発に高大連携

◆松戸フェスティバル

専修大学松戸高校2年生を対象とした松戸フェスティバルが7月5日、生田キャンパスで行われた。

本学教員による学部学科別説明及び模擬授業を受け、学部学科についての理解を深めた後、学生サポート体制の紹介、付属校出身者でつくる「Hi・Yo・Coの会」メンバーによる大学理解企画「専大（うち）くる！？」などで、実際の大学キャンパスと、松戸高校卒業生の大学での生活に触れ、リアルな大学像を体感した＝写真。

◆高校生のための英語学習法

文学部英語英米文学科の公開セミナーが、7月12、19日の2週にわたり開かれ、延べ143人の参加があった＝写真。

濱松純司教授の「英語の発音とリズム」、上村妙子教授の「〝英語ライティング〟のコツってなんだろう？」など英語を話したり、読んだり、書いたりすることが楽しくなる4講座が展開された。

◆1日体験入学

高大連携校の都立成瀬高校のキャリア教育の一環として7月22日に生徒37人が生田キャンパスを訪れた。高大連携連絡協議会委員の寺尾格教授による「言葉の身体感覚について」などの模擬授業と、キャンパス見学などにより、進路に対する意識を高めた＝写真。

◆司書インターンシップ

同じく高大連携校の神奈川県立ひばりが丘高校生6人が、司書の業務を理解するインターンシップを図書館で7月24日に行った＝写真。

大学図書館の業務内容についてオリエンテーションを受けた後、受け入れ業務、整理業務、閲覧業務を体験した。

平成20年度文科省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」に採択

KS（川崎・専修）コミュニティ・ビジネス・アカデミー

川崎市のまちづくり、都市型コミュニティ・ビジネス創出者を育成

文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」に申請していた「KS（川崎・専修）コミュニティ・ビジネス・アカデミー」の企画が採択され、11月からの第1期講座開講に向け準備を進めている。

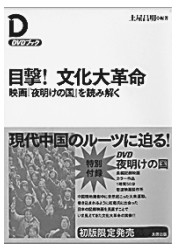
このプログラムは、第二の人生における活躍の場・職業獲得や起業支援のために、都市型コミュニティ・ビジネスを創出していくための社会的起業への参画の場を創造することを目的に川崎市と連携し、生活文化都市に移行しつつある川崎市で再チャレンジ可能な人材育成をめざすもの。

プログラムタイトルの「KS」は、専修大学と川崎市のジョイントプログラムという趣旨と、知識（knowledge）を社会（Society）にという本プログラムの基本メッセージを表現している。詳細は次号に。

専修人の新しい本

目撃！文化大革命
映画『夜明けの国』を読み解く

土屋　昌明編著



06年、本学で開催されたシンポジウム「イメージとしての文化大革命」での討論の模様などから中国の文化大革命（文革）を多方面からとらえた書。軸になるのがシンポでも上映されたドキュメンタリー映画『夜明けの国』（1967年制作・時枝俊江監督・岩波映画）＝本書にDVDで収録。

同映画は文革間もない中国東北地方（瀋陽市など）や北京市に撮影クルーが滞在し労働者、農民、学生らの生活を活写。『毛沢東語録』を手に「毛沢東万歳」を連呼する文革の象徴・紅衛兵のデモ姿など貴重な場面がちりばめられている。

本書では当時の撮影クルーや本学の下澤和義商学部教授など各方面の専門家が映画を分析。ヌーベルバーグの旗手ゴダールや中国をめぐる当時の言論に影響を与えた竹内好氏の文革観も論じられている。（太田出版・本体33333円＋税）

編著者（つちや・まさあき）＝経済学部教授。担当は中国語。

現代議会制度論
日本と欧米主要国

藤本　一美著

1890年に第1回帝国議会が召集されてから118年が過ぎたが、日本の国会が本来の機能を果たしているかといえば、必ずしもそうとはいえない。問題を改善するためにも、現在の国会＝議員制度を正しく理解する必要がある。

第1部で日本の国会を、第2部で日本の地方議会を、第3部で欧米主要国の議会制度を解説。本書では国の最高機関である国会に眼を向け、その仕組みや運営について理解を深めることが重要と説いている。（専大出版局・本体2400円＋税）

現代日本政治論 1945～2005

藤本　一美著

本書は1945年から2005年までの日本の戦後政治の軌跡をたどり、現代日本政治の特色と問題点を提示している。米ソ冷戦という国際情勢を踏まえながら、保守勢力と革新勢力の対立を中心に据えて論述を展開。

2部構成で、第1部では重要な政策、事件を年代順に列挙し、当時の政治状況を分析。第2部では、「日米安保体制の再検討」「村山内閣の歴史的位置」など、トピックスごとに考察を加えている。（専大出版局・本体 2800円＋税）

著者（ふじもと・かずみ）＝法学部教授。担当は政治学原論ほか。

憲法の現代的意義
アメリカのステイト・アクション法理を手掛かりに

榎　透著

憲法は何のために存在するか。このことは憲法理論や現実の憲法問題を考える上で重要である。しかし、その割に「憲法は国家を縛る規範である」と理解している人は、意外と少ない。

本書は、米国のステイト・アクション法理を手掛かりに、憲法の制約が国家だけに及ぶ場合と私人にも及ぶ場合の違いを考察する。

実は、この違いは決して小さくない。後者のように考えると、私人の活動は憲法に拘束・統制されることになってしまう。各人が「自由」であるためには、憲法にどのような役割を担わせるべきか、本書はあるべき姿を提示する。（花書院・本体2380円＋税）

著者（えのき・とおる）＝法学部准教授。担当は憲法。

新釈　四谷怪談

小林　恭二著

血も凍る怨霊物語として、日本人に「祟り」の恐怖心を植え付けてきた『四谷怪談』。ヒロインお岩さまがどのように形づくられていったのかが軽妙な筆致で綴られる。

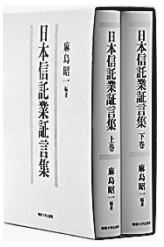
時は文化文政の、表面は華やかながら貧富の差がはなはだしい時代。借金苦を克服した貞女・お岩さまを祀る於岩稲荷は、貧困にあえぐ御家人の妻たちに信仰されていた。鶴屋南北は、そのお岩さまを怪談の主役に〝抜擢〟したのだ。

お岩さまが怨霊に変身する理由、物語における南北得意の逆転劇は…。胸がすくような筆者の斬新な発想の数々。残暑しのぎにぴったりの書だ。（集英社新書・本体700円＋税）

著者（こばやし・きょうじ）＝文学部教授。作家。

日本信託業証言集（上・下）

麻島　昭一編著



本書は大正末から昭和40年代までの日本信託業に従事した人々の証言を編集した1300ページの大冊。信託会社やその後身である信託銀行の経営者・社員をはじめ、官僚や学者など五十数人の関係者にヒアリングを行っている。特定の分野でこれだけ突っ込んだ幅広い証言集は珍しい。

編者との対話を通じて戦前・戦後の業界の変遷、経営や業務の実情・特徴などが赤裸々に語られ、これまでの信託の解説書では得られぬ具体性、面白さがある。証言の形で歴史的諸事実が記録されるのは有意義なことであろう。「日本信託業」という分野の発展過程・実態を当事者の貴重な証言から知ることができ、同分野を研究する上でまさに不可欠な労作である。（専大出版局・本体16000円＋税、分売可）

編著者（あさじま・しょういち）＝本学名誉教授。専攻は日本財閥史、金融史。